

# Marshall

## ロックの歴史はここから始まった！ アンプの王様、Marshallを知ろう！

ギターを弾いていると、次第にいろいろなところにこだわりたくなるといいます。フレーズのかっこよさはもちろん、ギタリストとしては「音色」が非常に大切です。自分の好きな音を追求するにしろ、好きなミュージシャンのサウンドへ近づけるにしろ、重要な要素になるのがギター・アンプです。今回はギター・アンプの王様、Marshallについて勉強しましょう。

### アンプも楽器の一部です

改めて言うまでもないかもしれませんが、エレキ・ギターを演奏する上で欠かすことができないのがギター・アンプです。では、「そもそもアンプとは何なのか？」ということ考えたことはありますか。「音を出すために必要なでしょ〜」という感じで、何となく使っている人は少なくないのではないのでしょうか。アンプ（アンプリファイア）は楽器用としてだけでなく、オーディオ用や電子機器としてのアンプなど様々なバリエーションがありますが、これらに共通しているのは音（信号）を増幅する...つまり、音を大きくすることです。

エレキ・ギターは弦の振動を電気信号に変換して音を鳴らしている楽器です。しかし、そのままでは小さな音しか得られないので、スピーカーで鳴らすためには音を大きくしなくてはなりません。そこで使われるのがギター・アンプ。つまり、「ギター・アンプで音を増幅して、初めてエレキ・ギターという楽器が完成する」ということなのです。エレキ・ギターの場合はアンプを使うことを前提とした奏法がたくさんあるので、「練習だから生音で良いや...」というのでは、楽器として不完全な状態で弾いていることとなります。これでは、いくら練習してもうまくはなりません。

そして、大切なのは「ギター・アンプは、ただ音を増幅するだけではない」ということです。先ほど「アンプにはオーディオ用のアンプもある」ということを述べましたが、一般的なアンプは元の信号（音）をできるだけ変化させることなく、音量のみを大きくできるものが理想とされています。しかし、ギターやベースの場合は真逆。元の音から大きく変化しても、かっこよければOKなのです。

その代表例がオーバードライブ（歪み）と言えます。歪んだサウンドはエレキ・ギターの醍醐味ですが、ギターやベース・アンプ以外では、音が歪んでしまうアンプは「粗悪品」として扱われてしまうのです。何が言いたいのかというと、エレキ・ギターにとってギター・アンプは単に音量を上げるためだけのものではなく、「音色を作る」という要素も持ち合わせているということ。ギター・アンプはエレキ・ギターの大切な相棒であり、もはや楽器の一部

と言っても良いでしょう。

### Marshallはドラム・ショップだった！？

今では当たり前存在となっている、オーバードライブ/ディストーション・サウンド。ロックはもちろん、ポップスでも最近の楽曲では超定番となっている音色ですが、その「当たり前」を作ったのがMarshallアンプなのです。Marshallは部屋はもちろん、リハーサル・スタジオやライブハウスに広く導入されている超定番のアンプ・ブランド。ギタリストなら誰もが一度は使ったことがあるはず。そんなMarshallの歴史を振り返ってみましょう。

Marshallはギター・アンプのイメージが強いと思いますが、実はドラム・ショップからスタートしたというのをご存じでしょうか。Marshallの生みの親であるジム・マーシャル氏はイギリス/ロンドンでドラマー兼ボーカリストとして活躍していたバリバリのミュージシャン。そんな彼がドラム教室をスタートし、生徒たちからのリクエストでドラム専門店「マーシャル・ショップ」をオープンしました。



Marshallの生みの親であるジム・マーシャル氏（2012年に逝去）。元々はドラマー兼ボーカリストとして活躍したミュージシャンで、ギタリストの要望に応える形でアンプ作りをスタート。現在のロック・シーンに多大な影響を与えた、Marshallサウンドを確立しました

これが1960年のこと。現在で言う、ドラム教室を併設した楽器店のようなイメージです。

すると、ドラマーがバンド仲間のギタリストを連れてくるようになり、そんなギタリストからの要望でギター・アンプも取り扱うことになったのです。リクエストを出したミュージシャンの中には、ザ・フーのビート・タウンゼントやディープ・パープルやレインボーで知られるリッチー・ブラックモアといった、後に世界的なギタリストとして活躍する人物の姿もあったのだとか。ちなみに、マーシャル氏のドラム教室も多くの超有名ドラマーを輩出しています。

そのような経緯で扱いはじめたギター・アンプですが、当時のメイン商品はFenderアンプ。Fenderはアメリカのブランドなので、輸入すると非常に高価になってしまい、価格的にも一般のギタリストが簡単に手を出せるものではありませんでした。しかも、当時のアンプは故障が多く、マーシャル・ショップにも修理の依頼が頻繁に来ていたそうです。そんな中でマーシャル氏は思い付きました。「自分たちでアンプを作れば良いじゃないか!」と...

とはいえ、いきなり完全にオリジナルのアンプを作り上げるのは大変なこと。そこで、当時人気を集めていたFenderのBassmanを参考に、ビート・タウンゼントらの協力のもとで作られたのがMarshall初のギター・アンプ「JTM45」でした。最近のアンプは大出力のモデルが多いですが、JTM45はモデル名の通り、45W。サウンド的には皆さんが想像するものとは少し異なり、激しく歪むようなものではありませんでした。

### ロックの歴史を作った名機たち

JTM45は当時のギタリストが求めるサウンドと、手に入れやすい価格もあって大ヒット。多くのギタリストに愛用されることとなります。1960年代は音楽シーンにも大きな変化があり、ロックが認知されるようになったことで、ギタリストたちはもっと大きな音と過激な歪みを求めるようになったのです。既にザ・フーとして人気を集めていたビート・タウンゼントは、より大きなサウンドを求めて12インチのスピーカーを8つ使ったキャビネットの製作をリクエスト。ライブハウスやリハーサル・



1959 Plexiはロックの歴史に欠かすことができない名機。現在も、特に人気の高い60年代末〜70年代初頭に製造されたモデルを復刻した「1959SLP」として発売されています

アンプの王様、Marshallを知ろう！



80年代以降のロック・サウンドを支えた名機、JCM800（写真は現行モデルのJCM800 2203）

スタジオなどに置いてあるキャビネットが12インチ・スピーカー×4なので、この要求がどれだけ無茶苦茶だったかは明らかです。

そこでマーシャル氏が考えたのが、12インチのスピーカーを4発搭載したキャビネットを2台重ねるというアイデア。これがマーシャル・スタック（マーシャル・ウォール）と呼ばれる、キャビネットの2〜3段積みセッティングが生まれた瞬間でした。ステージ上を覆い被さるように置かれたMarshallのアンプ/キャビネットは、その印象的なビジュアルとサウンドから、ロックバンドを象徴するスタイルとなったのです。なお、ここで生まれたモデルが「1959」...別名「Plexi（プレキシ）」と呼ばれており、ジミ・ヘンドリックスやリッチー・ブラックモア、ジミー・ペイジといったギタリストたちがこぞって使ったことで伝説となっているアンプです。

余談ですが、ジミ・ヘンドリックスというマーシャル・アンプとストラトキャスターの名手のイメージが強いと思いますが、当時のストラトキャスターはまったく人気がなく、「生産中止になる」という噂が出ていたほど。しかし、ジミ・ヘンドリックスがストラトキャスターを使ったことで一躍人気モデルとなり、彼の死後はエリック・クラプトンやジェフ・ベックなどがこぞって愛用。レス・ポールと並ぶ人気モデルになったという歴史があります。そのサウンドを支えたMarshallのアンプは、まさにロックの立役者だったということです。

その後もMarshallは精力的に新モデルを開発。例えば、コンポ・アンプの名機「1962（1961）」はモデル名を聞いてもピンと来ないかもしれませんが、「ブルース・ブレイカー」という愛称は聞いたことがあるのではないのでしょうか。これはエリック・クラプトンが「ジョン・メイオール&ザ・ブルースブレイカーズ」というアルバムで同アンプを使ったことから付

けられた愛称。このアルバムでは1962とレス・ポールの組み合わせが使われており、ロックの定番セットとされていました。

### そして、ハイゲインの時代へ

80年代に入ると、ギタリストのサウンドはさらにハイゲイン化。そんな中で生まれたのが、Marshall最大のヒット・モデルである「JCM800」です。この頃になると、チャンネル・ボリュームとマスター・ボリュームという2段階のボリュームが付けられるようになり、より歪んだサウンドを作りやすくなりました。ジェフ・ベックやスラッシュ、ザック・ワイルドなど、このモデルを愛用したギタリストは数知れず、まさにロックの代名詞として「ロック・ギターと言えば、Marshall!」という世界基準を作り上げたのです。

「歪んだアンプの前にオーバードライブやブースターを使って、さらに深い歪みを作る」という手法が定着したのもこの頃。大ヒットを記録したJCM



歴代のMarshallサウンドを1台で再現する、最上位モデルのJVMシリーズ

800にハイゲイン回路を追加し、さらに2チャンネル構成にした「JCM900」。その後継機となる「JCM2000」など、ギタリストの要望に応じて、時代と共に進化してきたMarshallのアンプ。現在の最上位機種はマーシャル氏と彼の娘であるビクトリアの名前を冠したJVMシリーズです。同シリーズは1959 Plexiから現在までのすべての機種を参考に、音楽シーンを作ってきた歴代モデルのサウンドを1台に盛り込んだ、究極のMarshallアンプです。

### ステージから自宅まで

ここまでは大型アンプを中心に紹介してきましたが、Marshallからは自宅や部屋で使えるような小型アンプも多く発売されています。代表的なのが、練習用アンプとして人気のMGシリーズです。片手で持てるほどコンパクトな2W出力の「MG2CFX」をはじめ、部屋はもちろんライブでも使える100Wのモデルまで、サイズや音量に応じてピッタリな機種を選択することができます。

MGシリーズの魅力は「小さくても、Marshallのサウンドを楽しめる」という点です。音を似せただけの模倣品ではない、100%本物のサウンドはMarshallでしか得ることができません。世界が認める王道のサウンドはギタリストなら絶対に知っておくべきです。Marshallのアンプを使って、腕も耳もしっかりと鍛えましょう。



自宅での練習にピッタリのシリーズ最小モデル「MG2CFX」にもMarshallサウンドがしっかりと受け継がれています